

平成22年度（2010年度）

国際教育 地球市民を地域とともに育てよう Part 9 報告書



新教材 「言葉がわからない」体験ゲーム 何が起った？（震災編）



財団法人 滋賀県国際協会

は じ め に

構想から約3年の歳月をかけて、国際教育研究会 Glocal net Shigaをはじめ、様々な方々のご協力のおかげで新しい教材を完成させることができました。「言葉が通じないところで、大地震に遭遇したら…?」という設定のシミュレーションゲーム「『言葉がわからない』体験ゲーム 何が起こった? (震災編)」です。動画を使いながら、安心して安全に避難できるかを疑似体験する内容となっています。

これまで、多文化共生に向けた教育活動などに取り組んできましたが、地域住民への周知については依然として不十分な状況にあるという現実が大きくは変わっておらず、日本語から情報を得ることに難しさを感じる方々の日々の生活での苦労や不安について、さらに広く理解を促したいと考えていました。そこで、そうした方々が置かれている厳しい状況がより増幅する災害発生時を想定した教材を開発することになりました。

教材に収録しているポルトガル語アナウンスを吹き込んでくれたのは、県立高校に通う現役のブラジル人高校生でした。彼女は、日本語があまり理解できない両親のために「自分がもっとしてあげられることはないかと常に感じている」と胸の内を明かしてくれ、今回の教材作成にも快く協力してくれました。また、新潟県中越沖地震（2007年7月発生）を体験された留学生たちの文集からは、その前に起こった中越地震（2004年10月発生）を経験した4年生たちが、その経験をいかして後輩たちをサポートしたことにより混乱を最小限にとどまらせることができたことがうかがえました。

確かに、内閣府では外国人を災害時要援護者と定義しています。しかし実際には、災害発生後は留学生たちもボランティアで地域を支える側として活動していた様子が書き記されており、彼らも地域の貴重な人材であり、日本人と外国人とが共に助け合える関係であったことがわかります。

地域に暮らす全ての人たちが、日頃から安全で安心して暮らせる多文化共生の地域づくりについて、この教材をきっかけに皆さんと一緒に考えていければと願っています。

平成22年度に行った国際教育に関連する事業や資料をまとめました。
みなさまの参考になれば幸いです。

平成23年(2011年)3月
財団法人滋賀県国際協会

平成21年度(2009年)国際教育ワークショップ

「地球市民を地域とともに育てよう Part.9 ～平和をつくる方法をみんなと一緒に学ぼう～」

平和的な国家および社会の形成者をつくるためには、平和形成方法を学習することが不可欠です。子どもたちの問題解決の力と、集団で活動するための力を育てるための創造的対立解決プログラム(RCCP)に基づき、みんなが話しやすい環境をつくり、学んだことを分かち合うためのワークショップや、「平和形成力(ピースリテラシー)」の教育方法と内容をワークショップ形式で考え体験します。



<午前の部>

「気持ちを認めるコミュニケーション 子どもとできる創造的な対立解決」

ファシリテーター (特活) 開発教育協会 事務局長 中村 絵乃さん

<全体>

私たちの行動のもとには様々な気持ちがある。自分の気持ちやニーズに気づくことや相手の気持ちも認めて意見を伝える方法などを考える。また、学級づくりや学びの場のヒントも紹介する。

【ワークその1：自己紹介・アイスブレイキング・流れの確認】

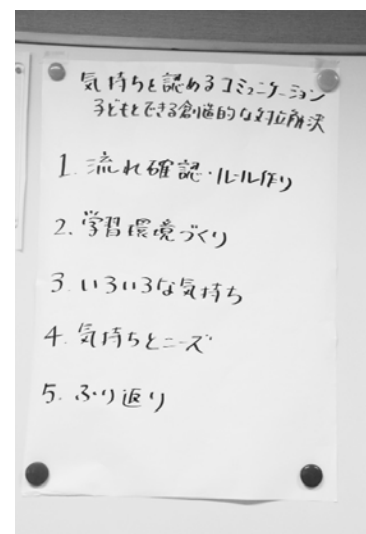
■ファシリテーターである中村さんによるプログラムの流れについて

今回紹介するプログラムは、子どもたちが自分たちの問題に向き合い、解決方法を探る中で、大人は子どもの力を信じて支え、子どもも自信をつけていくという流れを



<中村絵乃さん●プロフィール>

(特活) 開発教育協会事務局長 横浜市立大学非常勤講師
横浜市出身。大学卒業後(財)横浜YMCA勤務を経て、渡英。英国ヨーク大学大学院(教育学)でグローバル教育の実践を学び1998年に卒業。2000年より(特活)開発教育協会・事業担当。2006年1月より1年間、国際交流基金日米センターのフェローとしてニューヨークのNPOで研修を受ける。2008年4月より、同会事務局長。地球的課題を扱う教育(グローバル教育・地球市民教育・開発教育)の実践・研究を行なう。現在は、研修会等を行いながら、日本における「紛争解決教育」の可能性を模索中。



作ること、非常に発展があります。子どものことを大人が解決するということはよくありますが、子どもが悩んでいることや学校での問題を自分たちで解決していく姿勢を育てていくというのが長期的な目標になります。それが、今回の大きなテーマである「平和な世界をつくる」ということにつながります。一人ひとりがその問題に向きあって、何が出来るか考えていくという社会こそが、本当の平和をつくる社会になるのではないのでしょうか。

今回は特に「気持ち」に焦点を当てます。日常ではこの子はなぜこんな行動をするのか、この人はなぜこんなことを言うのか、ということが多いですが、私たちが普段「なんで」と思ってしまう自分自身の気持ちにも焦点を当て、分析も含めながら進めていきます。そして、大人自身が自分を振り返る時間にもしていきます。子ども同士のもめ事の解決やコミュニケーション方法など、家族間でも使える内容です。また、平和学習との関係、仲間同士のつながりなど、少しでもヒントを得て帰っていただければと思っています。

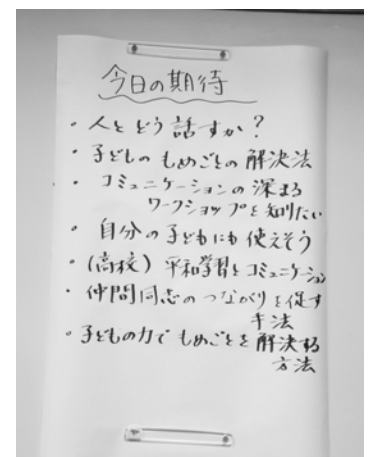
■アイスブレイキング

参加者全員が縦横無尽に歩き回り、ファシリテーターが「2」と言ったら二人組、「3」は三人組、「4」は四人組となり、お互いに自己紹介をする。[名前、どこから来たか、何をしているか、夏の好きなところとその理由、本日この場所にきた理由]



<どんな内容を話したか?本日学びたいこと/参加者の声>

- ◎ 以前、中村絵乃さんから人とどう話すかを学んだので、今日もそれを学びたい。
- ◎ 私は大阪市内で小学校の教員をしていますが、子どもたちのもめ事が起こったときの解決方法を身につけ、子どもたちに学活や道徳でワークショップをしながら、コミュニケーションを深めるような活動が出来たらと思って参加しました。
- ◎ 私は県内で小学校の教員をしています。今回の参加者は教育関係の方が多くようですが、その中にお母さんがおられ、ご自分のお子さんが大きくなってこられて、今日の演題に興味を持って来られたということを知り、それがいいなと思いました。
- ◎ 高校の教員です。学校現場で「平和学」とか「平和学習」とかいとうと、先生方は飛びつくんですが、いざやろうとするとときに、「コミュニケーションが」ということを言い出すと、急に引いていかれます。自分の中ではある程度わかっているんですが、なかなか人に説明できない。そのあたりのつながりを学びたいと思って来ました。
- ◎ 私自身、在日コリアン3世なんですが、そういった世代、境遇の者同士で集って勉強会をしています。その会では、参加しているメ



ンバーから意見を聞き出したり、集団を一緒に盛り上げたりすることに苦労しています。参加者一人ひとりの主体性をどう作っていくかというところで、何か手法を学べたらと思い参加しました。

- ◎ 中学校の社会科の教員です。現在、現場から離れて行政で人権教育の担当をしています。中学校の現場でよく思っていたんですが、もめ事を解決するときに、どうしても教師の力でおさめてしまう。だから先生の力量があるから表面的にクラスが落ち着いているというケースはありますが、実際は、もめ事が起こったときに子どもの中で解決ができるというのが望ましい集団だと思っています。そのために、子どもたちにいろんなコミュニケーションの力をつけていかないといけない。そのことを勉強しに今日は参加させていただきました。

<参加者でルール作り>

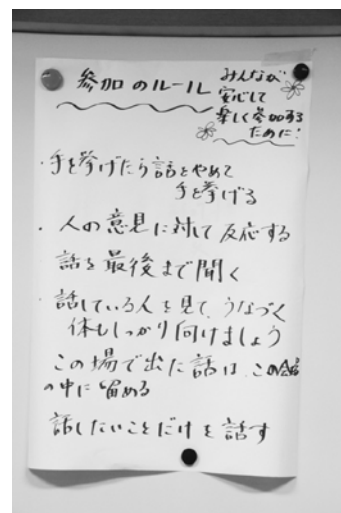
その1) ファシリテーターが手を挙げたら話をやめて手を挙げる。

その2) 人の意見に対して反応する。

その3) 話を最後まで聞く。

その4) 聞いて頷く。頷くときは顔だけではなくて体も向ける。

その5) 個人情報としてお話しされたことは、この中だけで留める。



【ワークその2：私は大切】

その1) ハートで共通点を探そう

3人の人と自己紹介・共通点を探す

- ① 加者が輪になって座り、目を閉じて心臓に手を当て、メッセージに耳を傾ける。

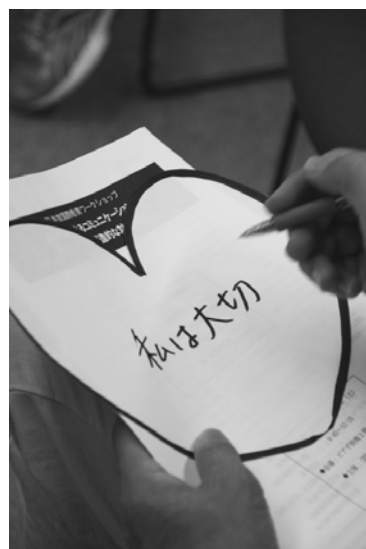
「心臓は物理的に血液を動かす機能だけでなく“気持ち”として、楽しかったり、うれしかったり、悲しんだり、辛かったりと、いろんなことを感じる感情を生む場所であることを確認する。人の感情は非常に重要で、それが人のい



ろいろな考えや行動に結びついている。心の中で生まれる様々な気持ちは、私たちの存在をとてユニークなものにしている。私という存在は、この世の中に私しかないなくて、同じ存在は一人もいない。私はとっても大切な存在です」

- ② 目を開け、「私は大切」と書いてあるハートに自分の名前を書く。

ハートの裏の左側部分に自分の好きなこと、好きなもの、食べたいもの、夏休みにやりたいことなど10個を簡条書きで書く。旅行だったら行く場所とか、本のタイトルとか、映画のタイトルなどを細分化して10個を埋める。



- ③二、三人と自己紹介をして、好きなもの、好きなことの共通点の一つを探す。

お互いの話の中で共通点を見つける。ハートに書いていなくても、相手が言ったことに対して自分も同じだと思えばよい。共通点を1つでも見つけられたらよい。

<共通点を見つける意味>

初対面の方とは話がしにくいと思います。しかし、何か一つ、例えば旅行へ行くのが好きだとか、この料理が好きだとか、この時間にこういうことをするのが好きだとか、共通点が見つかったら、少し距離が近くなります。はじめて教室に入る子どもたちも同じ気持ちを持っていると思います。いつもあまり話さないクラスメートが実はサッカーが好きだった、実はあのテレビが好きだった、漫画が好きだった、ということで距離が近くなります。ですから、これを最初に学校で紹介することをおすすめしています。クラスの友だち全員の名前を左側に書いて、自分との共通点を一年間かけて探そうでもいいですし、一学期かけて探そうでもいいですし、そういうちょっとしたことでも、気持ちはぐっと近づきます。共通点探しというのはクラスづくりの一つのヒントだと思います。



その2) マリアのハート

否定的な言葉でハートが破れていく様子を表現する。実際にそのようなことがあるかについて話し合う。

マリアちゃんの日

<A>参加者から一人、マリアちゃんという小学生の女の子になってもらい、もう一人にはマリアの一日というのを演技していただく。

マリアちゃんの周囲の様々な人がマリアちゃんに投げかける不用意な言葉によって、マリアちゃんのハートがずたずたになっていく様子を、ハートの紙を使って表す。



＜B＞心ない言葉でずたずたになったマリアちゃんに違う言葉をかけて違う一日にする。

＜A＞の1)～8)を、思いやる言葉で表現してみる。

「マリアちゃんの日　＜A＞」

ある朝、マリアはお母さんに起こされてもすぐには起きませんでした。とうとうお母さんが部屋に入ってきて怒鳴りました。
1)「何ぐずぐずしているの。はよ起きな学校遅れるで」。
マリアは起きて、お気に入りの服を着ました。ところが、お姉さんが部屋に入ってきて言いました。
2)「そんな服着て行くん？　頭悪く見えるで」。
マリアはお姉さんの言うことを無視することにして、髪を流行のヘアスタイルにセットしました。ところが朝食を食べに台所に行くと、お父さんが目を丸くして言いました。
3)「その髪どうしたんや。どぶねずみの巣みたいやで」。
テーブルについてマリアの大好きなアロエヨーグルトが一つ残っていたので、食べようとふたを開けると、お兄さんが文句を言いました。
4)「おまえがいつもありったけ食っちゃうから、おれの分ないやんか」。
マリアは家を出るのがすっかり遅くなりました。マリアが学校に着くと、校庭には誰もいませんでした。みんなすでに教室に入ってしまったからです。マリアと一緒に学校に着いたお兄さんはつぶやきました。
5)「おまえはいつものろまんやから」。
マリアが教室の入ると、先生が黒板に出席者の数を書いていました。マリアに気づいた先生は言いました。
6)「誰かさんは、本当にのろまね」。
そして「遅刻」と大きな文字を黒板に書き、その下にマリアの名前を書きました。
休み時間になると、男の子たちがマリアをつついて「のろま、のろま」と何度もからかいました。それを見ていた女の子たちは言いました。
7)「仕方ないわ。だってホンマにのろまやもん」。
学校の時間に、先生はマリアに大きな声で読むように言いました。マリアがある漢字を間違えて読むと、教室の何人かがくすくす笑いました。
帰り道、マリアは走って行って道の割れ目に足を引っかけたでしまいました。マリアは大の字に転んでしまったので、手足を擦りむき、お気に入りのスカートに穴を開けてしまいました。家に帰ると、お母さんはマリアの姿を見てこう言いました。
8)「またスカートあかんようにして。あんたにきれいな服着せられへんわ」。

「マリアちゃんの日　＜B＞」

1)「マリア、とっても素敵な一日が待っているわよ。早く起きましょ」。「どこか悪いん？大丈夫か？」。
2)「それはパーティ用にとっておきましょう」。
3)「お父さんが直してやろうか」。
6)「よく来たね」。
※何か遅れた理由があった。
7)「笑っちゃだめだ」。
※他の笑っている生徒に対して言う。自分が間違えることもあるから。
8)「けがしなかった？」。

＜褒める言葉を増やす＞

もちろん信頼関係がある上で、ちゃんと言うことは言うべきだと思います。ただ、普段私たちはどうしても否定的な言葉を使ってしまう。「もういつもアンタは」とか、「またこんな格好をして」といったメッセージだとなかなか相手には届きません。言われた方もどうしてそ



う言われているか分からないので、気分が悪くなります。言葉を少しでも変えていくと、マリアの心に届きやすくなるのではないのでしょうか。これは一つの例です。小学校などでこのワークショップをするときは、自分が言われるとうれしい言葉や、相手が喜んでくれた言葉を出してみます。けなされて悲しかった言葉もみんなで出し合いますが、黒板には書きません。それよりもこういう言葉をかけようということを、意識的に考えてもらいます。教室の壁に張り、使ってみたい言葉をどんどん増やしていくことも出来ます。資料の最初のページにある、「子どもをほめる100の言葉」というのがあります。これは、みんなで考えてブレインストーミングして出た言葉です。皆さんも学校の中で、“教室の中で言われるとうれしい言葉100・何年何組バージョン”を作ってみてください。これは考えただけでは使えません。大人たちには、これを冷蔵庫に張って、一日一つどれか使ってくださいと言うと、改めて意識して使うようになります。言われるとうれしい、そして言ってもうれしい言葉をたくさん増やしていくこと。それを教室や学校に増やしていくことが大事なような気がします。

【ワークその3：いろいろな気持ち（怒り）】

その1) 用紙「気持ちビンゴ！」に書いてあるいろんな気持ちについて、「どんな時にそう感じたか」とそれを答えた人の名前を記入する。

全ての気持ちを5人以上の違う人から聞き出す。一列埋まるとビンゴになる。

＜感想／参加者の声＞

- ◎「かなしい」「腹が立つ」といった気持ちは出にくかった。
- ◎感激されたことを聞いたんですが、娘さんが結婚されたということで、それだったら、うれしいとか、幸せとかという気持ちとは別に、悲しい、寂しいといった、他の気持ちにもつながっていくことがあるように思いました。
- ◎うれしいなど人の感激した気持ちを聞いていると、自分もプチャうれしい気持ちになってくるんだ、ということが分かりました。
- ◎人によって「どれを聞こうかな」とか、「この人はどういうときに安心と思うのかな」とか、そういう好奇心みたいなのが出てきたのが面白かったです。
- ◎答えるときに、自分はこういうときにこういうふうに思ったりしてるんだと改めて自分のことに気づき、相手に聞いたときには、自分も同じだと思ったりと、客観的に気づかされました。
- ◎具体的にどういう場面でどういう気持ちになったのかと聞くことで、共感できるというか、僕にもそんなことがあったなあと、そのときのことを思い出してしまいました。

気持ちビンゴ！

★全て、違う人から答えをもらうてください！
★それ以外の気持ちを全感した、と言った人を見つけて、どんな時にそう感じたか、と名前を書いてください！
★1列埋まるとビンゴです！できるだけたくさんの方の答えをもらってください！

うれしい	安心だ	せつない	かなしい	うらやましい
どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____
名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____
ほらはらす	いとおしい	わくわくする	がっかりだ	困った
どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____
名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____
ありがたい	くやしい	幸せ	ショックだ	心配だ
どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____
名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____
楽しい	元気いっぱい	イライラする	へとへとだ	つらい
どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____
名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____
感激した	ほっとした	緊張する	こわい	腹が立つ
どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____	どんな時：_____
名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____	名前：_____

いば



<気持ちの中にもたくさんのレベルがある>

気持ちを通していろんな背景とか、自分と共感する部分など、とてもたくさんの気づきがあったと思います。気持ちというのは、その人の大切な部分とつながっていると思われたのではないのでしょうか。そうするとまたその人の答えからいろんな背景が見えてきます。普段気持ちについて聞かれることはありません。私たちは意識していませんが、毎日非常にたくさんの気持ちを感じています。実はここに書いてある以上の様々な気持ちがあります。「かなしい」をわざとひらがなにしたのは、「かなしい」にもいろんなレベルがあります。ちょっとかなしいなという気持ちから心を裂くぐらいのかなしい、人にはとても言えないような気持ちまで、いろいろなかなしいがあります。それを「気持ちのパレット」という人もいますし、1ミリ単位の気持ちという人もいます。私たちは一言でかなしい、うれしい、楽しい、の判断をしますけれども、実はその中にとっても細かいひだがあります。

その2) ワーク「怒りの火山」で怒りの気持ちに焦点をあてる。……

「気持ちビンゴ!」において、参加者が出にくかった気持ち「腹が立つ」について。多分意識したくない気持ちであり、してはいけないなと何となく思っている気持ちである。同じように「イライラする」「辛い」も当てはまり、そうした怒りという感情はどういう気持ちなのかを知る。

また、最近は「むかつく」とか、「うざい」とか、そういう言葉を使う子どもたちが多い。その言葉の背景を探るためにも、まず、自分自身を振り返ってもらう。

〔「怒りの火山」の例〕

以前から友達と旅行へ行く約束をしていた。休みを取っておいたのにも関わらず、友達に突然キャンセルされた。そのときの気持ちは非常に腹立たしい。でも同時に、がっかり、かなしい、辛い。よく考えるとさびしい、信頼していたのに、という気持ちがある。



その3) 怒りの分析：「怒りの火山」の説明

■「気持ち」：怒りの下にどんな気持ちがあるのか。がっかりした、かなしい、つらい、さびしいという気持ちが怒りの背景にある。

■「満たされないニーズ」：最初の気持ち。

「どうして欲しかったのか」、もしくは「自分はどうしたかったのか」。具体的には「約束を守ってほしい」、「楽しみにしていたことを理解してほしい」、「もっともっと自分のことを尊重して欲しかった」。この気持ちには、「自分も相手をもっと信頼したかった」「いい友だちでいたかったし、それを信じたかった」というものがここに隠されている。価値観も実はニーズの一部である。自分の中にある大切な価値観として、「友人との信頼関係は大切だ」というのもあり、それを満たされないから…

■怒りが出てくる。約束していたのだからと非常に怒りを感じる。もしその怒りが大きくなると

■激怒になり、さらに怒りが大きくなって…

■暴力になる。暴力は相手に手をあげるだけでなく、戸をバーンと締めるとか、電話をガチャーンと切るとか、物に当たるなどの暴力も含まれる。それが最終的に噴火してしまうと、もうこの人とは話さないとか、絶縁状態になったりもする。

その4) 怒りの分析の共有：ワーク「怒りをふり返る」

～怒りを掘り下げて見てみる～

<怒りや先に挙げた否定的な気持ちは、その裏にあるニーズの存在に気づくために重要な気持ち。>

とても自然なこと>

多くの場合は自分を大切にしてほしい、自分の考えを理解してほしい、自分の言っていることをちゃんと聞いてほしいとか、そういう自分の存在に対して尊重してほしい、容認してほしいというニーズ、または、安全に暮らしたい、効率よく仕事をしたい、というようなニーズが見えてくると思います。こうしたニーズが満たされないという背景に怒りが生まれてくるのです。

怒りというのは非常に強い感情です。「怒りの火山」の上に行く早さはものすごく早い。最近は、怒りがすぐに暴力につながってしまい、人を蹴る、殴る、モノにあたるといった傾向が目につく。だから、怒りを下げる練習が出来るといいと思います。

怒りの下の気持ち、どうしてイライラしているのか、怒りの他にもかなしいとか、辛いとか、不安とか、もしかして恐怖があるかもしれない。子どもは何か恐怖を感じて怒りに変わっていくこともあります。でもそれが見えなくなってしまう。だから、「どうしたの?」「何かイライラしているんだね」「聞かせて?」というふうに聞いていくと、何か満たされていないものが見えてきます。



いつも物に当たっていたり、いつも問題を起こしてしまう、あの生徒の背景にはどんなことがあるのかなというの、先生の方からでも考えていただいて、生徒に話しかけてみたりということも出来ると思います。

怒りの分析は主に先生向けにやるもので、直接生徒にははしませんが、生徒には怒りの火山の紹介をしたりします。ニーズという言葉が非常に分かりにくいので、何が大切か、一番自分に大切なものとか、ここで何をしたいのか、どうしてほしかったのかという言葉で書いたりもします。

「自分にはもう怒るエネルギーもないのだということに気づきました。引きこもる子とか、死んでしまう人たちがいるのは、エネルギーがなく





なっていて、こんな感じなんだなあと思いました。だから皆さんが一生懸命に書いておられるのを見て、皆さん生きているな、エネルギーがあるな、とうらやましいと思いました」という感想を参加者の方からいただきましたが、「怒り」という気持ちにはエネルギーが必要です。「〇〇してもしょうがないや、誰も分かってくれない」ということになると、感情がなかなか出なくなってしまう危険です。少しでもイラッとした時に、それは何かのサインであるということをも意識していただければと思います。イラッとしたことを毎日振り返っていると、大変なことになりますが、実はそれはとても重要なサインで、ご自身が大切にしている部分、ご自身が何か満たされていないサインです。それに気づけば、それを置いておいても大丈夫です。ただ、気づかないでそのままいってしまうと、爆発するということもあります。なので、

今みたいに「こんなことでイライラしたんだよね」と話す場があれば、それがまた別の方向で消化され、「私もあるわ」というふうに共感することも出来るので、そういう意味でこのワークをしました。

＜中学校でのワークの時に配る詩「内側に向けて窓を開こう」「耳を澄ませて」の説明＞

子どもたちも「良い気持ち」と「悪い気持ち」があるということは何となく察しています。悲しんだり怒りを持ったり、イライラするのは悪い気持ちだ、だからそれは感じてはいけないんだ、というふうに思ってしまうがちですが、実は感情には良いも悪いもなく、とても自然なものである、それをまず受け止めようということを理解してもらえたらと思います。気持は、ためてしまうと、それがどこかで違う形で出てしまうので、実はその気持ちをちょっと見てみよう、怒ってもいいし悲しんでもいいんだよ、ということを理解します。

それから自分の気持ちを受け入れると、今度は相手の方にも耳が向くこともある、ということも紹介します。「気持ちビンゴ!」のようにいろんな気持ちのワークをしたり、写真などを見せて「この人、どんな気持ち?」というふうに考えさせたり、お互いにインタビューをしあったりして人のいろんな気持ちにも気づきます。また、気持ちは自分のとても大切なものを代弁してくれているんだということを理解してもらいます。教室の中で、「どんな気持ち?」と先生が声をかけるだけで、「あ、気持ちって言ってもいいんだ」となりますので、ぜひそういうことも一緒にやってみてください。悪い気持ちも言ってもいい環境ができると、とても話がしやすくなります。良いことは話しやすいですが、「昨日ちょっと悲しいことがあったんだ。聞いてくれる?」という話ができると、生徒にとって安心できる場になります。気持ちの共有が上手に出来ると、クラスの雰囲気も良くなるのではないかと思います。

【ワークその4：気持ちとニーズ】

その1) ロールプレイ；それぞれのケースの気持ちとニーズを考える（エアコンをつけるか、消すか、休みの日にどう過ごすか）

【ロールプレイ1：内容説明】

ペアになって向かい合って立つ。AさんとBさんを決める。AさんとBさんは会社の同僚。Aさんは営業で、外回り担当。今日も暑いですが、Aさんはさらに暑がりです。Bさんは内勤。冷え性なので、クーラーは入れたくない。せっかく外回りを一生懸命やってきて、帰ってきたので、エアコンを入れたいAさん。エアコンをつけたくないBさん、この対立をロールプレイで、そのまま起こりうる状況を再現する。背中向きになり、3、2、1、GO! の合図で振り返り、Aさん「ただいま」から始める。

【再度問題解決のためのロールプレイをする】

＜解決策＞

- ◎ 時間を決めてクーラーをつける
- ◎ 冷え性のBさんは上着を着る
- ◎ 外営業から戻って来たAさんに冷たいお茶を出す。

【ロールプレイ2：内容説明】

夫と妻の休みの日の行動、夫は家でゆっくり、妻は外に出たい

【再度問題解決のためのロールプレイをする】

＜解決策＞

- ◎ お昼は一緒に外に出掛けランチをして、夕方には帰る。
- ◎ ホテルのレストランに行くことで、外に出るのと屋内にいる双方のニーズを解決。
- ◎ 家でDVDを見るのではなく、外に出て映画館で映画を観る。

【対立点のニーズ：隠されたたくさんのニーズ～ウィン・ウィン型・全く違う解決策がある～】

＜隠されたたくさんのニーズ＞

Aさんは外回りで暑くて、エアコンをつけたかった。Bさんはつけたくなかった。対立点で対立していると、つけるか消すかのどちらかになります。なぜAさんは、エアコンをつけたいのですか？暑いからです。涼みたいわけ。外回りから帰ってきた。どんなニーズがありますか？休みたい、忙しかったから、疲れを取りたい。どんな対応を期待していましたか？「おつかれさまでした」



対立点とニーズ

A	分析の視点	B
エアコンをつけたい	対立点	エアコンをつけたくない
涼みたい 休みたい 疲れた いやなんだ	ニーズ	暑くない 家 快適 いやすんだ

↓
AとBのニーズを両方解決する
時間、服、お茶、うちわ

◆対立点とニーズ

A	分析の視点	B
家にいたい	対立点	外に出たい
ゆっくりしたい 寝たい 暑くない	ニーズ	気分爽快 面白いこと 行きたいところ

↓
AとBのニーズを両方解決する
時間、DVD、映画、ホテル

と癒されたい。Bさんはどうでしょう。内勤で働いているBさんがエアコンをつけたくないのなぜですか？寒いんですよ。このまま快適に仕事をしたい、効率よく仕事をしたい、今のままで効率がいいわけですね。Bさんが効率よく仕事ができ、Aさんが休める、疲れを取る、癒される、といったニーズで見るということは、先ほどの「怒りの火山」でいう気持ちの下のニーズになります。Aさんが疲れを取りながら、Bさんが快適に仕事をするためにはどうすればいいのか、というふうに考えます。時間でエアコンをつける、服を着る、お茶を出す。これは、癒されたいとか、疲れを取りたいというニーズの解決になります。エアコンはつけられなくてもお茶を出して、うちわであおぐ。「おつかれさまでした〜」。そうすると、癒された。ちょっと疲れも取れます。

たくさんのニーズがあって、どのニーズが重要か、それは本人にしか分かりませんが、実は問題を満たす解決策はたくさん考えることができます。「子どもとできる創造的な対立解決」とは、このニーズに焦点を当てるとのことなのです。

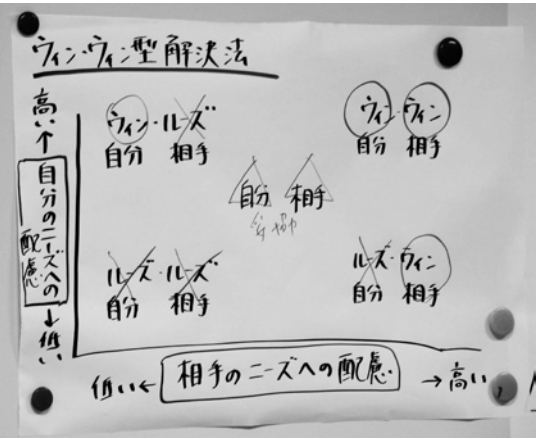
もう一つの例、家にいたいAさんと、外に行きたいBさん。家にいるか外に行くかでやっている、ずっと対立していますね。どちらかが折れるしかない。家にいたいAさんのニーズは？ゆっくりしたい、暑いから、寝たい。外に行きたいBさんのニーズは？気分転換。せっかく天気もいいし、面白いことをしたい。家にいたいか外に行きたいかではなくて、AさんがゆっくりしながらBさんが気分転換するにはどうしたらいいか。Aさんが少し休みながら、Bさんが面白いことをするにはどうしたらいいか、というふうに考えます。そうすると、DVDから映画館にしたり、同じ室内でもホテルのロビーやレストランにします。そうすることで、気分転換しながらゆっくりするという両方のニーズが満たされます。

<ウィン・ウィン型>

これを、ウィン・ウィン型といいます。それぞれのニーズの部分、相手のニーズを配慮するということでこの表があります。自分のニーズにすごく配慮して、相手には全然配慮しないとなると、自分は○だけど相手は×。これはウィン・ルーズになります。ルーズ・ルーズはどういうものか。例えば、この週末どうするかというので、本当は一緒に過ごしたいのにケンカ別れ。結局、私は映画館に行くからあなたは家で寝てれば、ということになると、実はルーズ・ルーズです。

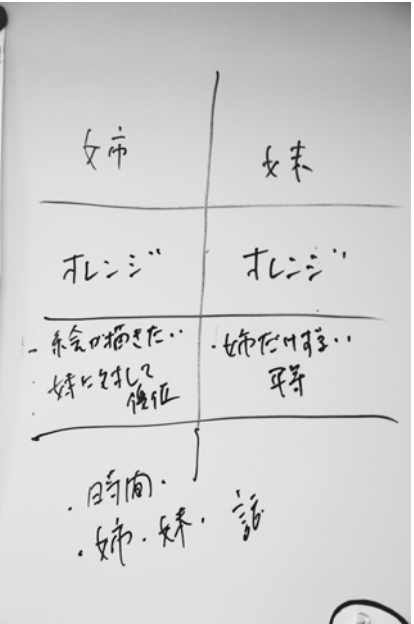
両方のニーズが満たされるというのがウィン・ウィンですが、私たちの生活では、妥協が多いかもしれません。半分ぐらいニーズは満たされるけれども、もう少しでウィンウィンになれるかもしれない。なかなかこのあたりは難しいところです。

人には、自分を抑えてしまって相手を立てるという人がいる一方で、自分は強く出るという方もおられます。子どもたちも相手によってこれが変わると伝えます。すごく強い相手には従ってしまう。そういうこともふまえながら、すべての対立にウィンウィン型解決法が可能だとも思いませんけれども、私たちは実はここに近づく可能性も持っているというふうに思います。



<オレンジの例>

例えば、一つしかオレンジがないところで、姉と妹がいます。二人ともオレンジが丸々一個欲しいと言います。皆さんならどうしますか？単純に考えると、半分ずつ分けるようにするんですけど、ここでは、なぜオレンジを欲しいかと聞いてみます。姉は、ケーキを焼くために皮が欲しい。妹は実が食べたいと言う。それなら、半分にする必要はないですよ。ニーズまで下りて行くと、もしかしたら普段妥協していたことが、ウィン・ウィン（両者が満足する状態）になるかもしれません。でも、こんなにうまくいくことは、めったにありません。では、オレンジを欲しいと言っている理由は、他にどんなものがあると思いますか？姉は、妹に対して優位に立ちたい。「だって私、お姉ちゃんだもん。なんでいつも妹と同じでなきゃいけないの？」妹は、「お姉ちゃんにだけって、ずるい。平等にしてほしい」と思っている。



もしこれがニーズだとしたら、もうオレンジは関係ありません。両親の立場であれば、お互いに「あなたが大切ですよ」という時間を取るとか。オレンジじゃないけれども、それぞれの欲しいものを別に与えるといった解決法が考えられます。ニーズはたくさん隠れています。オレンジにずっと集中していると、半分にするとか四分の一にするとか、また新しいオレンジを買ってくるという解決法しか浮かびません。けれども、なぜこの子がオレンジを欲しいと言っているのかというところまで掘り下げていくと、全然違う解決法があります。これがまさにウィン・ウィン型解決法と言われるものです。

【ワークその5：ふりかえり】

- (1) 気づいたこと、よかったこと
- ・知らない人としゃべる場合に共通点を探し合えば、話しの話題も増え、共感ができる。
 - ・怒りというのは、どこか自分で切っているところがあった。
 - ・対立している時に、対立し合っている同士の原因を、何が必要なのかを探りながら解決していく。
 - ・怒りを振り返る、共有することで“もしかしたら大したことでもないかも”と思えた。
 - ・共通点が増えるとその人に親しみがもてる。
 - ・表面に見えるものだけでなくその裏にあるニーズを知る必要があり、それを知らないことには、本当の解決には至らないということ。
 - ・対立する面があってもお互いに接点を見出していくために話し合う（ゆずり合う、妥協点を見出していくため）必要がある。
 - ・怒りの分析の中で、最近怒りを感じない、あるいは怒りの予想がつくので、それほど大きな爆



発はしないということが話された。いつも一緒にいる相手に対してはそういった予想がつくので、怒りという感情が起こるのは、初対面の方や職場以外の場所なのではと感じ、上の意見に納得した。

- ・他人の気持ちの底に存在している様々な思い（ニーズ）を理解していくことがお互いのコミュニケーションを円滑にしていくことにつながる。

- ・他者理解をしていくことが問題解決につながる。

- ・ほめる言葉の多様性は自尊感情を高めること。

- ・大人社会に出るといちいち一つひとつの感情に向き合うと生活できないと思います（あえて無視している）。

- ・特に企業（会社）で感情を出すことはマイナスのイメージとして捉えられていると思う。

- ・自分の“怒り”の下のニーズを考えることで、その気持ちがおさまってくるのを感じました。自分自身のニーズ・価値観に気づいていく大切さがわかりました。と同時に、子どもたちのニーズにも気づいていこう！と思います。

- ・自分のことが尊重されるとうれしい、安心する。

- ・現象についてのみ解決するのではなく、その奥に隠れているものまで見つけることができれば、ウィン・ウィンの解決につながっていくのだろうと思う。

- ・認めることはそれほど簡単なことではないと思う。やはり相手を否定したくなったり、指摘したりしたいもので、自分の気持ちを殺し、相手を尊重することは、お互いにとって良いことではないと考えつつも、人は尊重されるとうれしいものだからということで、自分の気持ちを殺すことは現実的にある。

- ・人は世界の中で様々な感情を持つ。且つ、普段その気持ち、感情についてじっくりと考えることは少ない。

- ・怒りやかなしみなど、様々な感情の裏にニーズがある。自分にも相手にもそういうニーズがあることを理解し、問題解決することができる。

- ・自分の話を聞いてもらえる時間が心地よい。→ルールで決めているという安心感

- ・気持ちはもっと出していい。 → いい、悪いはない。

- ・怒るのにはエネルギーがいる。

- ・ひとつの気持ちは独立してあるのではなく、良いも悪いもいろいろな気持ちにつながっているのだということ。

- ・相手のうれしいこと、幸せなことを聞くと自分までうれしくなること。

- ・相手のことばで自分のことに気づくことができた（好きなこと、好きなもの）。

- ・自分だけが悲しかったり、辛かったりしているんじゃないかということ。他の人もいろんな気持ちを抱えながら生きているのだということ。

- ・結局は、その人の満たされないニーズにどう向き合うかが大切なんだということ。

- ・自分自身が今どんな心の状態にあるかということ。

- ・感じたことをすぐにそのまま言うより、少し余裕をもって相手の気持ちを考えてから発言すれば、人間関係がうまくいく。

- ・他人同士なら普段も意外とちゃんとできているけど、家族間となると難しい。より認められたい、理解されたいから。

- ・共通点を見つけることの大切さ、集団づくりに役立つということ。

（２）分からなかったこと、もっと知りたいこと

- ・自己中心的な人に対してはどうしたらよいか？ 特に全くゆずる気配のない人とか？

- ・自分自身を表現できない人がいる場合、どうしたらいいか。

- ・怒りに対して、パワーを使わずに怒るには…？

- ・具体的にどうすればよいのか、まだ不完全。学校なら児童に関する情報を教員が共有する必要があるのでは。そのためには教員同士が仲良くなっていないかならならないと思う。

- ・職場で会う人は、コミュニケーションを取る機会や関係を修復できる機会があるけれど、初対面の人はどこで「サヨナラ」なので、どう感情に折り合いをつけるべきか。難題だ。

- ・怒りの感情が出たあとには、どのようにしていけば良いのか。

- ・どうやってニーズを出すかがポイントと思う。

- ・深いニーズまで探っていくと、不信感で固められている人にはマイナスがあるのではないかな？

- ・自分が相手の気持ちを考えることの大切さをわかったとして、相手にどう気づいてもらうのか。

- ・人の感情について知っていくと奥深いし、コミュニケーションの中で役立つことが数多くあると思う。その一方で、我慢することを覚えてしまって気持ちを押さえてしまうことがある。自分の気持ちを直感とか感情をうまく伝える方法が知りたいと思った。

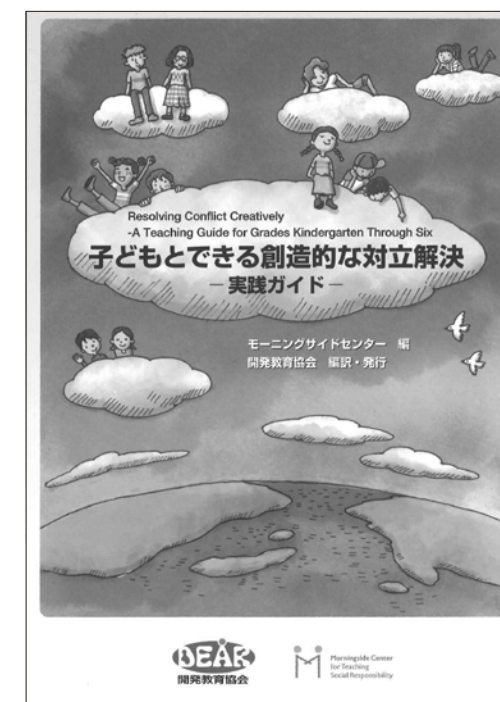
- ・ある程度人間関係がある中で、どうワークを行っていくとよいかもっと知りたいです。

- ・ウィン・ウィンの解決法をどのように見つけていくのか。

- ・ニーズを見つけることは、たいへん難しい。同等の立場では、なかなか解決につながらないのではないかな？

- ・マリアちゃんのハートをやぶらない声かけをもっと追求？してみたい。

- ・大人ならロールプレイで上手に表現できるが、子どもならどうするか（発達段階で違う）。



<午前の部>

「子ども中心の、元気が出る平和教育」

ファシリテーター 京都教育大学教育学科 教授 村上 登司文さん

<全体>

「平和とは何だろうか」ということをイメージした後、平和教育をどのように作っていけばよいかを、実際の参加型手法の学習を通じた講座で展開。平和形成力（ピースリテラシー）」の教育方法と内容をワークショップ形式で体験する。



<村上登司文さん●プロフィール>

京都教育大学教授。専門は教育社会学で「平和教育の比較社会学的研究」が現在の研究テーマ。広島県出身。イギリスのブラッドフォード大学で平和学修士を取得。広島大学大学院で教育学博士を取得。京都教育大学で、「平和教育論」の授業を学部と大学院で開講。平和教育授業研究会(PEG)を毎年ほぼ一回開催。仕事のモットーは、「教育とは子どもに希望を語ることで、教員養成とは希望を語る仲間を増やすこと。希望を持てないと明日の社会は作れない」である。著作に、『戦後日本の平和教育の社会学的研究』(2009年)、『日本から発信する平和学』(共著 2007年)、『今平和とは何かー平和学の理論と実践』(共著 2004年)などがある。

【ワークその1：自己紹介・アイスブレーキング】

■アイスブレーキングその1：「握手ゲーム」

5人に挨拶して握手する。終わったら座り、最後に座った人が自己紹介をする。さらに全員が立ち、まだ握手していない人5人と握手して座る。最後に座った人が自己紹介ということを繰り返す。

■アイスブレーキングその2：今日家からここに来るまでにかかった時間の短い順に並ぶ。

お互いに会話をせずに、ジェスチャーだけで並ぶ。順に聞くと、どんな方がどこから来ているかということがわかる。



【ワークその2：平和をイメージする】

その1) 平和はどんな色？

3人グループになって平和の色を3人がそれぞれイメージ、なぜその色をイメージしたのかを言う。



◎ピンクと白

◎黄色と青と白（黄色はなんとなく、ひまわり）

◎青と緑（青は空、海）（緑は植物）

◎白と虹

◎白と水色と虹色

その2) 平和はどんな音？

川の音・鳥のさえずり・教会の鐘の音・風のそよぎ・森とか公園の鳥・教会で歌っている子ども・ふわふわとたんぽぽの白い種が飛んでいるイメージ・ホルンの音・子どもが運動場ではしゃいでいる・子どもの笑い声・波の音・ファンファーレ

その3) 平和はどんな味？

◎甘いもの（洋風の味・あんこの味・さわやかな甘さアイスクリーム）／甘いものを食べていると平和を感じる

◎水／安全に水が飲めるということが平和なのではないか

◎甘酸っぱい／酸っぱいものを経験した後の甘さ

◎おむすび／好きなものの味

◎作ってもらったもの／いつも自分が作っているから

◎好きなもの（アイスクリーム・メロン）◎満腹感

その4) 平和はどんな手ざわり？

猫や犬・羊毛のやわらかいもの・赤ちゃんの肌

その5) 平和はどんな匂い？

赤ちゃんのおしめを替えるとき・夏の終わりの夕暮れに歩いている時・草の匂い・青い箱の牛乳せっけん・ひまわり・カレー（インドのガンジーをイメージ）

その6) 平和でない風景は？（3人で話し合う）

◎人がいたら、笑っている人がいなくてうつむいていたり泣いていたりという様子。

◎一つが、破壊された家々。それと死体。もう一つは、とげがいっぱい。

◎放置されて人の手が入らなくなってしまった田んぼ。

◎「はだしのゲン」で最後に原爆が落とされて黒い雨が降るので、黒。空が曇っているような風景。

◎青い空とか緑が全然ない、茶色い殺伐とした風景。

◎人と人が背中合わせで立っている状況。学校で子どもがトラブルを起こして、これからどうやってつき合っていくんだという話になった時、うまくつき合えないから、もう付き合わないという結論になってしまった。

◎テレビでよくあるイラク戦争とかの場面がやっぱりパパッと出てきます。

◎けんかしているイメージが浮かびました。



- ◎メーリングリストの中の誹謗中傷のしあい。
- ◎山中越えの道を運転しているんですが、崖みたいなところから泥とかが落ちてきている状態。
- ◎武器を持っている子ども。
- ◎働かされている、働かざるを得ない子どもたち。
- ◎事故とか事件。例えば今、中学の女子生徒が親を放火して殺したという、親が暴力を振るっていたという。
- ◎よくニュースに出てくる自爆テロの後の風景。
- ◎排外主義集団みたいな人たちがデモをしたりするようなシーン。

その7) 平和を作る行動？どうしたら平和が出来る？

- ◎関心を持つことから始まって、声を出す。
- ◎自分自身の余裕。
- ◎周りの人を傷つけないこと。
- ◎隣の人と仲良くする。
- ◎相手の立場を理解して尊重するというか、認めるということかなあと。
- ◎信じること。
- ◎ゆるす。



その8) あなたが平和を感じるのはどんなときだろうか？（これまでの回答から）

「朝寝坊できるとき」「ホットケーキを食べるとき」「絵を描いているとき」「歌を歌っているとき」これは自分の好きなことを自由にできるということです。「心配や不安がないとき」「友だちと話している時」「心配や不安を誰かに聞いてもらった時」「間違いを素直に認められたとき」「おかしいことを『それはおかしい』』と言えたとき」「みんな一緒に何かを作っているとき」「美しい町並みを見る時」「大好きな人が幸せそうな時」「世界の子どもの笑顔を見る時」「誰かと希望を語っている時」

つまり、自分が自由になるとか自己実現する、あるいは愛され認められているとか、他人の幸せを見る時、そういうのが平和であるということになる。

〔資料を元に解説〕・・・

■平和形成力（ピースリテラシー）とは？

平和形成力は英語で「ピースリテラシー」と言う。平和教育で、戦争が無いことだけで充分とするのではなく、より積極的な平和を作ることをめざす。より積極的な平和というのは、人権が十分保障された状態で、自由があり、自分が安全に生活できる、人と人が平等であること。平等といっても単に同じというのではなくて、そこには公正さが必要。人と人がしっかり必要なものを与えられる、やったことがちゃんと評価される。そういう公正さというのも要求される。

滋賀県の場合、いろんな外国の方が滋賀に転入され、そういう意味では「多文化」「多民族」による共生社会であり、一緒に生きる必要がある。

そして、何が平和なのか、あるべき平和像というものを子どもにイメージしてもらう。その平和

な社会を作っていく。そういう力が「平和形成力」という。

その場合、注意しないといけないのは、ただ平和の題材を扱えばいいというのではなく、教え方そのものも平和教育でなくてはいけない。学校から子どもたちを広島に連れて行って、昼間は被爆者の話を聞いて、夜は宿舎で騒いだ子どもたちを正座させて叩いてというような、昼は平和学習、夜は体罰学習では、平和ではないということになる。クラスの中も平和的な雰囲気、子どもたちの仲がよく、足を引っ張り合わないとか、みんなで応援するということが大事。

また、希望も必要。最近聞いた希望の定義で「Hope is a wish for something to come true by action.」 Hope is a wish、希望は望みである、for something to come true、何かが本当になる、by action、アクションによって。したがって、希望というのは「何かやったらそれが現実になるというのが希望だ」ということになる。そういう平和を目指して、希望を持ってその何かが実現するように、それに参加する意識や態度や行動力というのが「平和形成力」ではないか。

■「いきいき平和学習」が必要

子ども中心に、みんな元気が出る。子どもでなくても、講座の参加者が中心になって元気が出る、というのが大事ではないか。その場合、一人ひとりの興味や関心を大事にしないといけないし、興味、関心を大事にするには身近な問題を扱う。生活の場で発生する問題、いじめとか校内暴力。また、実際にテレビで子どもたちが見るものを扱う。

戦争について教える場合も、戦争は65年以上も前の話になり、子どもたちには昔話になってしまう。その昔話を上から教えられると、受け身になってしまう。受け身の平和学習というのはあまり効果がないということで、子どもが主体的に自覚的に学習できるような方法というものを工夫する必要がある。

■ピースリテラシーの必要性

その意味で、戦争について教える場合には、教え方を工夫しないといけない。子どもに追体験させること。自分で話を聞く、質問をする、行ってみる、というので自分で追体験をし、それを他の子に伝えていくというもの。こどもの主体性を大切にした平和学習の実践が大事である。

教育基本法の第1条には、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とある。平和な国家や社会を形成するというのが、揺るぎのない教育の目的であることから、平和を形成する力を目指していくことで間違いはないと思われる。

便宜的に、平和形成力というのを定義しているが、平和な国家および社会を形成する活動に想像力豊かに参加する知識と態度と技能を「ピースリテラシー」と規定する。よって、今と未来の「平和な社会」を形成するには、平和な新しい社会を創る子どもたちの知識と態度と技能を育てることが必要。

■平和教育とは？

私たちの教育実践、開発教育も国際理解教育も平和教育も、平和を目指しているという意味では共通する部分がある。それを5つの平和教育（表1）に分ける。

＜表 1＞平和教育の概念の分類と達成課題

平和教育概念	平和教育がめざす課題
①平和についての教育	平和問題に関する知識の学習
②平和のための教育	平和的態度や技能の形成
③平和を大切にする教育：平和を通じての教育	教育方法の改善、平和文化の形成
④教育における平和	教育（管理）構造の改善
⑤積極的平和としての教育	教育権の保障

①「平和についての教育」（education about peace）では、戦争や紛争や構造的暴力などの平和問題を題材（教材）として取り上げ、こうした平和問題に関する知識を提供しようとする。この平和教育では、平和に関する知識を与えることを目的とする。教師にとっては平和問題の題材に何を選び、どのような知識を与えるかが課題となる。被爆体験学習や特定の戦争についての学習がこれに当てはまる。

②「平和のための教育」（education for peace）は、平和をめざしての教育であり、平和を志向する態度や技能（スキル）を学習者に育成することを目的とする。平和を志向する態度を形成する芸術教育や情操教育もこれに含まれる。集団間の争いを非暴力的に解決する能力、また平和的な社会を形成することに積極的に関わろうとする態度を形成しようとする。この教育は、平和問題を「直接」教えるのではなく、平和な社会の建設に対して人材育成を通じて貢献しようとする。平和のための教育では、命や人権を大切にする人権教育や、異文化に対する寛容的態度を形成する多文化教育や国際理解教育などと、教育目的や教育方法で重複する部分が多い。

③「平和を大切にする教育」（education in peace）または「平和を通じての教育」（education through peace）では、教育方法そのものが平和的であるべきとされる。教育方法が平和的であるとは、強制的、威圧的、抑圧的などの権威主義的な教育方法を教師がとらず、子ども一人ひとりの個性や感性と人権を尊重した教育方法を用いることである。平和問題を題材として授業で取り扱っていても、そこでの教育方法が権威主義的であり体罰を用いるなど平和的でないと、それは平和教育とはみなせない。このタイプの平和教育実践は、児童中心主義の教育とか、個性尊重の教育などの用語で実践される教育方法と類似している。

④「教育における平和」（peace in or through education）では、教育行政、学校、教室などの各レベルの教育組織において、紛争・暴力・葛藤などが少ない平和的な状況（場）を形成しようとする。例えば、以下のことが課題となる。中央集権的でなく地方分権的な教

【ワークその 3：学校での教育実践がどの平和教育に分類されるか？】
3 人グループになり、学校などでの自身の教育実践が平和の観点から考えると、どの平和教育に分類されるかを話しあい、上記のように 5 つに分類ができるということを頭の中に入れる。

育行政組織や民主的な学校管理組織にする。自由で明るい学校現場を作る。相手を非難・中傷することがない暖かい教室の風土を作る。いじめや暴力のない仲間づくりを行うなどが、「教育における平和」を達成する平和教育となる。

⑤「積極的平和としての教育」（education as positive peace ）では、単に戦争がない「消極的平和」の成立だけでは不十分とみなし、貧困・差別・不公正がない「積極的平和」な社会においてのみ、一人ひとりの教育権（学習権）が十分に保障されると考える。教育界における男女差別や障がい者差別やマイノリティ差別をなくすことがめざされる。また、日本国内のみを問題にするのではなく、開発途上国の貧困問題を改善して子どもたちの就学率を高め、教育権を人々に保障する社会状況を創ることに参加することも望まれる。日本国内の外国籍の子どもたちの多くが不就学状態にある問題はこれに含まれる。

■平和教育の方法

平和教育では、授業方法そのものが「平和的（peaceful）」でなくてはならないとの立場に立つ。それには子どもの自発的・主体的な授業参加をうながすために、参加型手法の学習を取り入れる。参加型手法の学習を通じて平和問題解決の方向が明らかになれば、子どもがさらに資料集めや調査を行うことにより、平和問題についての理解をいっそう深めることになる。

（1） 子どもの平和イメージを広げる
【ワークその 2】で行った「平和をイメージする あなたが思い描く平和はどんな色？ どんな音色？ どんな手触り？ どんな味？ どんな気持ち？ 平和はどんな表情？ あなたが行う平和はどんな行動？ どんな風景？ どんな願い？」という、具体的に平和についてイメージさせて、そこから子どもに考えさせていこうというもの。

（2）平和の未来像を描く
未来を考えてみると実は二つあって、多分こうなるだろうという未来と、こうあって欲しいという二つの未来がある。望ましい未来と予想される未来。その二つをイメージさせて、具体的にどうすれば予想される未来を望ましい未来に変えることができるのか、を考えさせる方法論がある。

（3）子どもの能力感を強める

●エンパワーメント

開発途上国の貧困、地球温暖化、環境汚染、核兵器の拡散などの大きな問題に対面する時、子どもは自身だけでは何もできないという無力感に陥り、意欲はなくなり（凍え）心理的にかじかむ（numbing）。平和への課題が子どもにとってあまりにも大きいので、えてして課題からの逃避やその無視、解決への無力感に陥りやすい。子どもたちにそうした大きな課題に取り組ませるにはエンパワーメント（能力感を強めること）が必要である。

●「支援」の教育方法を

子どもが、他の国の同じ年齢の子どもの恐怖感を知るとは、自分に身近な問題と感じ、子ども同士の連帯感を持つかもしれない。子どもたちにとって解決困難な大きな問題に向き合うためには、平和形成に向けて子どもたちを「支援」することが必要とされている。

<支援のための平和教育の方法>

①加型の学習方法により、参加の体験を持たせ、子どもに参加の喜びや楽しさを味あわせ、集団成員間に連帯感を育てる。

②平和に貢献したピース・ヒーロー（例えばノーベル平和賞受賞者など）の活動を伝える

③平和社会の形成に努力している身近な人々や平和運動団体の活動について教える。中学生が知っている人物や団体の活動について調査しまとめ、それを知識として教える。

（４）子ども参加の学習方法で

平和教育を進めるには、前提として教師間で自由に討論できること、自由に教材を選択できることが必要である。平和問題のとらえ方にはいろいろな視点があることを子どもに示し、子ども自身が考え自分の意見をまとめさせるように支援する。教師は自分の意見の押しつけでなく、子どもに考えるヒントを与え、子ども同士が議論することにより、自分の意見をまとめる力を身につけさせる。

（５）参加型手法の活用

①ブレインストーミング：参加者全員でたくさんの意見やアイデアを出し合い、そこから「何か」を見つけていくための手法。全員が参加する、一人ひとりの意見やアイデアを尊重する、出された意見やアイデアを次につなげる、という点で参加型手法の基本的な活動。

②部屋の四隅：部屋の四隅に「Yes」「どちらかといえばYes」「No」「どちらかといえばNo」と書いた紙を貼っておき、ある質問に対して参加者が自分の考えの所に移動する。最初の質問に全員が移動した後、各コーナーの人に、なぜそう思うか、意見を聞く。そして次の質問に移り、また全員が自分の考えのコーナーに移動する。それを何回か繰り返す。理由を聞くことにより、アイスブレイキングにもなり、みんなの考え方の共通性や違いとその理由に気づくことができる。少数派の悲哀とか、自分とは意見が違ってもそれなりの理由があるという相手の理解にもつながる。

③ランキング：ある課題について用意されたいくつかの選択肢を、良いと思うものから順に並べる。その過程で、参加者同士の意見を交換し、また、個人でやってみた後で、他の参加者と選択順を比べながら議論する。

【ワークその4：部屋の四隅／

恋人同士で食事をするとき、男は女より多めにお金を出す。】

「Yes」「どちらかといえばYes」「No」「どちらかといえばNo」に分けて、その理由を聞く。

◎「Yes」の人の理由／自分がいつもそうだから。

◎「どちらかといえばYes」の人の理由／たまには代わってもいい／相手の立場で、払えそうだったら払ってもら

◎「No」の人の理由／決めつけることはない。両方の経済状態など、いろいろな状況があるので、基本的には割り勘がいい／実際そんなことしてもらったことがない／お金を払うのが好き／払ってもらいたくない／払おうとしたら女の子が「払う」といって払ってくれる／いつまで続くか分からないから／経済状況によって違うから／相手に気を遣ってもらわなくてすむ



④フォトランゲージ：写真にキャプション（簡単な解説）を付けたり、写真の中のそれぞれの人の吹き出し（せりふ）を考えてみる。そうした活動により、写真に写っている人の立場に立ち、その人がどんなことを考えているのか、何を訴えようとしているのかなど、想像してみることで、他者に対する共感的な理解の力を高める。

⑤ロールプレイ：ある特定の立場になったつもりで、ある問題について考え、それを表現する。立場が異なるものの間で討論を行うが、参加者がそれぞれの立場や考えを受けとめた上で、相手の意見の尊重や合意形成を目指す。ある一つの問題についても、立場が異なれば多様な意見があることの理解を深める。相互理解のために、ロールプレイの後に「ふりかえり」の時間を十分に持つことが大事であり、演じた役割について子どもがどう思うか、他の子どもの役割について何を感じたかなど、意見の交換が必要である。ロールプレイの後に、子どもたちの間に対立が生じ、他の子に対して違和感が残っては平和学習の意味がなくなる。



■ 平和をつくる

【ワークその5】で平和な社会をつくることに貢献した人や団体についてお互いに語りあったことで、自分が知らなかったことをいろいろ聞ける。また、どの人を選ぶかによって個性が出てくる。語り合いで、平和をつくる平和構築というのは一体何かを探る。

（１）平和構築とは

平和構築とは、「永続的な平和の実現に必要な社会的基盤を作ること」であると考えられる。

平和構築は平和を脅かす要因を排除していく姿勢で

ある、とされる。広い意味での平和構築には、全世界で平和を作り上げるために行われているすべての活動が含まれている。平和構築の担い手も多様で、紛争地の人々みずからによる平和構築活動があり、それを助けるために行われる国際社会による平和構築支援活動もある。平和構築では、国際機関や政府機関だけではなく、NGOなどの民間団体も重要な役割を担っている。

（２）平和構築のための教育

①消極的平和を構築するための教育：戦争やテロ、また地域社会での暴力がない消極的平和を実現するための教育である。戦争体験の継承や、過去の戦争について学ぶ日本の平和教育はそれに該当する。

②積極的平和を構築するための教育：国際理解教育、異文化間理解教育、多文化教育、寛容の教育、人権教育などが該当する。また、政治教育（市民教育）も含まれ、そこでは政治的洗脳や虚偽の

【ワークその5：平和な社会をつくることに貢献した人や団体について】

以前ブレインストーミングで挙げられた平和な社会をつくることに貢献した人や団体について2人組でワーキングをする。1分間交代で自分が知っている人物や団体について相手に話す。ただし、質問はしない。交代で4回する。

情報に惑わされず、自分で考え行動する市民性（シティズンシップ）を養うことが期待されている。

③平和構築についての教育：平和構築の方法や歴史についての教育である。戦争防止装置や防止システム、反戦平和運動や反戦平和意識の形成について学ぶことも含まれる。

④平和構築としての教育：開発途上国の教育開発に貢献する教育開発貢献が該当する。途上国の教育に対する国際協力の研究は「国際教育開発」と呼ばれている。紛争後に民族ごとにバラバラになった社会が、共通の価値観や連帯感を全く持たずに国家として成立するのは難しい。各民族の母語による教育環境の整備を進める教育政策も含まれる。

（２）平和をつくるとは

平和をつくるというのは、右記のようなこと全てが平和をつくることになる。

■ 子どもの平和貢献意識

（１）平和への貢献

実際に学校現場の子どもたちはどんな意識を持っているのかを東京、京都、広島、那覇の４都市の中学校で調査。

＜表２＞社会が平和であるために何かしたいと思っているか（2006年調査）

回答	男子	女子	全体
はい	63.7	79.9	71.5(1036名)
いいえ	36.3	20.1	28.5（413名）
計	100%	100%	100%(1449名)

表２では、７割の子どもたちは平和のために何かしたいと思っている。特に女の子の方が高い。戦争への反対も女の子の方が多く、その意味では女性の方が平和主義的で性別で違いが出てくる、というのも面白い結果である。

＜表３＞平和のためにしたいと思っていること（2006年調査）（複数回答）

表３では「わからないけど、何かしたい」という回答が６割ある。具体的にどんな人、どんな団体を知っているかという、回答した生徒の２割程度で、マザー・テレサが２２人。「もったいない」のワンガリ・マータイさん、ユニセフ親善大使の黒柳徹子さん、オードリー・ヘップバーン、ガンジー、杉原千畝さ

回 答	全 体
わからないけど、何かしたい	60.0%
貧しい国への援助活動に協力する	40.3
自然保護に協力する	31.9
他の人と仲良く力を合わせ、いじめをなくす	29.2
平和の大切さを人々に訴える	23.3
平和運動に参加する	13.9
その他	3.5
％の合計（％の母数）	202.1(1033名)

＜みんな平和をつくっている人たち＞
（出典：岩川直樹『人はなぜ争うの？』大月書店、2002）
いのちを大切にしている人／自然を大切にしている人／一人ひとりを大切にしている人／拳を開こうとしている人／壁を開こうとしている人／心を開こうとしている人／問題を分かちあおうとしている人／資源を分かちあおうとしている人／悲しみを分かちあおうとしている人／立場を認めあおうとしている人／価値観を認めあおうとしている人／文化の違いを認めあおうとしている人／事実を知ろうとしている人／歴史を知ろうとしている人／痛みを知ろうとしている人／飢えをなくそうとしている人／差別をなくそうとしている人／地雷をなくそうとしている人／相手の声に耳をかたむけている人／自分の声を伝えようとしている人／たがいの声を編みあわせようとしている人

んが拳がっている。

ガンジーは、中国、アメリカ、ホノルル、デンバーでの調査でも拳がっており、ガンジーはその意味でユニバーサルな平和貢献者といえる。団体名ではユニセフというのが多く、国連、NGO、赤十字とかWHOがあり、案外子どもたちが知っているとも言えるし、書き込んだのが調査対象の２３％なので少ないとも言える。分からないけれども何かしたいという子どもがいるのであれば、教えれば、平和のために何かやりたい、やってくれるのではないかという期待が出来る。

平和構築の活動家または団体として、①世界的レベルで有名な著名人・団体、②国や地域で著名な人・団体、③市町村などの地域社会へ貢献する人・団体など、三つのレベルがある。子どもたちにはピース・ヒーローを教えていくことが大事。それは子どもたちの導きの星である。ただし、それはノーベル賞を取っているといった特別な人ではなく、身近なところ、地域で活動する人、団体というのが子どもにとっては、自分が何かできるというのを考える助けになる。

「将来平和な社会をつくる活動や仕事をしたいと思うか」との質問に、したいと「思う」回答生徒の割合は14％（212名）とかなり低い。ただし、「思わない」生徒も22％と少なく、「どちらともいえない」とまだ志望を決めていない生徒が62％と最も割合が多い。

中学生達がしたいと思う「将来平和な社会をつくる活動や仕事」の例

- ①戦争を教える活動に参加するものとして、「戦争を後の世代まで伝えたい」とか「ボランティアで平和というものを伝えていきたい」がある。
- ②環境に関する活動として、「木を切られた森にまた新しい木を栽培すること」「環境問題の温暖化に組みたい」「動物保護、絶滅しそうな動物や捨てられた動物の保護」がある。
- ③医療に関する活動として、「医者になって開発途上国へ行く」「戦争でけがをした人の手当」、また「新薬を安く貧しい人々にあげる」がある。
- ④国際交流活動として、「文化交流にもつながる通訳」「国際児童基金で働きたい」がある。
- ⑤国内での活動や職業として、「介護士」「障害者（盲目等）への援助」「虐待されている子进行ける」「いじめがない社会にしたい」「警察官」などがある。
- ⑥その他の意見として、「すべての仕事で平和は作れると思う」があった。

【ワークその6：ロールプレイ（平和形成力について）】

6人のグループになり、登場人物（中学生Aと中学生B、教師AとB、保護者AとB）のそれぞれの役割になり、「平和についてどうつくっていったらいいのか」ということを議論する。中学生Aは学校では友だちと楽しく過ごしたい。中学生Bは平和な社会を作ることに関心したい。教師Aは平和学習で過去の日本の戦争について知るのが大事だ。教師Bは現在の平和問題や平和活動を知らせていきたい。保護者Aは平和学習より子どもの学力を身につけさせることが大事だ。保護者Bは身近なところで国際協力が出来ると思う。というそれぞれの考えの6人が主張しあう。共生社会の形成に積極的なBの人が、消極的なAの人にどう対応できるかが課題となる。

中学生A：「毎日を愉快地に、学校では友達と楽しく過ごしたい」

○平和の問題については、今まで考えたことがなかった。
○戦争について考えることは、陰気で暗いイメージがあるので好きではない。
○自分のまわりの友達のはのんびり平和そうにしており、日本は平和だと思う。
○平和問題に熱心な人は、デモをしたり署名を集めたりして大変そうなので関わりたくない。
○自分が一人でがんばっても、世界が変わるわけではない。

中学生B：「平和な社会をつくることに貢献したい」

○平和な社会をつくるのに努力した人や平和団体（NPOなど）について学びたい。
○日本にも差別や貧富の格差があり平和とはいえないので、もっと平和になればと思う。
○日本は外国に対し、①教育支援、②食糧援助、③環境保護などの分野で貢献すべきだと思う。
○貧しくて学校に行けない子どもが世界にたくさんいる。途上国は人口ばかり増えて、問題を解決できないと思う。
○将来平和に役立つことを私はしたいが、先生は平和をつくることを今何かしていますか。

教師A：「平和学習では、過去の日本の戦争について知ることが大切である」

○学校では、戦争について知ることを重視し、戦争体験を伝えるべきである。
○国語教科書の平和教材を使って、子どもたちに戦争の被害を受けた人々の気持ちを理解させるようにしている。
○広島や長崎の被爆者の体験談を聞くことにより、子どもたちは原爆や核兵器の本当の恐ろしさを知ると同時に、自分や人のいのちの大切さが分かる。
○原爆被爆の実際はむごいが、修学旅行に行く小学校高学年になれば、被爆の実際を直視することができる。
○戦時下では「言論が統制され」戦争に協力させられた。戦争に協力させる政治体制を作らないように、政治に対する批判力を育てることが大切である。

教師B：「現在の平和問題や平和活動を知らせていきたい。」

○平和は戦争がないだけで充分でなく、いろいろな暴力(差別や政治的抑圧)が少ない安心して暮らせることである。
○社会科の授業で、環境破壊や、地域紛争などの平和に関する時事問題を取りあげ、インターネットを使って「調べもの学習」を行わせている。
○子ども達に、自分で何ができるかを考えさせていきたい。
○平和な社会の形成に向けて、一步踏み出す勇気を持たせたい。
○外国籍の子どもが滋賀県では随分と増えており、彼らを差別しない態度を育て、子どもたちが共に協力する仲の良い学校づくりをしたい。

役づくりの方法

- ① 1回目は登場人物の内容を読む。
- ② 2回目は、登場人物の台詞を覚えて頭に入れる。
- ③ 3回目は左記の役割内容にないことで、どんなことをこの人は言うだろうかということを想像する。



保護者A：「平和学習より、子どもに学力を身につけさせることが大切である。」

○近所にブラジル人が急に増えて、人情や伝統を大切にする昔ながらの地域（滋賀）の良さが薄れている。
○ブラジルから2・3年間出稼ぎに来ている人や子どもに対して、大事な税金を使うのはもったいない。
○給付の「びわこ奨学金」をブラジル人の高校生がもらっているのに、滋賀県の貧しい子どもが返済必要な奨学金しかもらえないのは不公平である。
○「平和形成力」とはどんな力ですか？ 子どもが将来社会に出るために役に立ちますか？
○不況が続く現在、大学に進学して子どもが正社員として採用されるように、先生は受験に合格する学力を伸ばしてほしい。

保護者B：「身近なところで国際協力はできると思う。」

○昨年、言葉の通じない外国人留学生のホームステイを引き受けたが、心が通じ合った時は本当に嬉しかった。
○外国籍の子どもが学校でいじめられたり、勉強に付いていけなくて高校に進学できないのはおかしい。
○私は、ブラジル人の子どもが小学校に適應できるように、日本語支援ボランティアを行っている。
○中国や韓国と仲良くするためには、日本の過去の戦争についても学ぶ必要がある。
○平和な国際関係をつくるのは大へんな仕事だが、一人でもできる平和な活動はあると思う。

＜ふりかえり＞

- それぞれが持っている平和のイメージが違うんだなあということと、それまで過ごしてきた人生の経験知がイメージになって表れているというのが分かった。私は教員をしています、子どもたちの中にも「平和に対して何かしたい」というのが7割もいる。その7割の子どもたちを、生かしきれていないというか。学ぶ機会をちゃんと与えているのか、そういう反省材料になりました。
- 平和学習というと、広島や長崎、沖縄のことなど、過去の戦争の話素材にしたものが多く、それも大事ですが、もっと現代のこと、広い意味でいうと今までやってきた人権教育とか、あるいは仲間づくりなど、全てが平和学習なのだろうと思うのですが、そういうところも改めて確認させていただきました。ロールプレイはこの6人のメンバーの議論をかみあわすのが少し難しかったかなという気がしました。
- 一つお聞きしたいのは、大学生で平和教育の意識を高く持たれて教員になられた方は先生のゼミには多いのでしょうか？

（回答）平和について卒論を書くというのは数年に何人かで、院生の論文では去年は1人、一昨



年は2人、今年はゼロです。平和教育という授業を学部でやっていますが、15、6人の受講です。院生だと10人以上はとっていますが、全体的にうちの大学が平和教育に関心をもった学生を出しているかというそれはノーですね。それほど関心はないというのが一つあります。

- 最後のロールプレイは大変いいなと思いました。私は中学校に
いるんですが、なかなかここまで自分の思いを言葉に表現するの
が難しい。表現力をどう身につけるかが一番の課題です。それが
原因のトラブルが多くて、これを参考にしながら2学期、何か出
来たらいいなと思いました。
- 保護者Aさんでの対話は厳しいなと思いました。保護者Bさんの
内容で、中国や韓国の人と仲良くするためには過去の戦争につい
ても学ぶ必要があるという意見で、教師ABをつなげたり、教師
ABと保護者Bで保護者Aさんに何か伝えられたのではないかと
思いました。私のグループでは滋賀県で教えておられる先生が
いらして、ブラジルの子たちはもっと厳しい現状にあるんだとい
う話しをしていただき、私個人としては説得力があったのですが、
保護者Aさんは子どもの学力重視なので、対話と言われてもちよ
っと難しいなと思いながらやっていました。



<まとめ>

このロールプレイは、かなり主張が違うため、合意するのが難しいというのが実態です。いつもは1回目、2回目と2度して、やはり主張が合わないなというロールプレイなんですが、今回は2回目には対話という形でやっていただきました。もうちょっと本当は2回目の台詞を変えないといけないのかもしれませんが、それがちょっと難しかったのですが、ふりかえりの発言のように、ある意味一人ががんばっても平和学習は難しいわけです。先生と一緒に協力するとか、子どもを平和形成活動に取り込むとか、保護者の協力を得るとというのが平和学習に限らず国際教育も大事ではないか。それが分かっていたら、明日から教育現場で何とか前に進んでいけるのではないかと期待しています。